

小特集「記憶の存在論と歴史の地平」に寄せて

直 野 章 子*

1980年代から90年代初めにかけてみられた「メモリー・ブーム」を論じたアンドレア・ヒュッセンは、2003年の著書で、記憶という話題は使い尽くされた感があると「記憶疲れ（memory fatigue）」を指摘した¹⁾。しかし、21世紀に入ってから、記憶に関わる議論はますます活発になっている。英語圏では、記憶研究に関するハンドブックやリーダーが次々と刊行されており²⁾、2008年には国際誌 *Memory Studies* が創刊され、2016年には国際学会 Memory Studies Association が創設されている。ブームは過ぎ去ったかもしれないが、記憶に関わる研究は、学際的な研究領域として制度化されるに至ったのだ。こうした国際的な動向に比べて、日本では、1990年代半ばから2000年代初めにかけて盛り上がりを見た後、記憶研究への関心は薄れているように見受けられる。とはいえ、記憶という概念が提起した、歴史記述に関わる認識論的、方法論的、そして倫理的な課題、あるいは、個人や集団のアイデンティティと尊厳に関わる政治的、倫理的な課題が解決されたわけでは、けっしてない。

「記憶」が突きつける課題、とりわけ、暴力によって傷を負った人びとの歴史と生に関わる問題について、共に考えていく場を持ちたい——。この願いとともに、2度にわたるシンポジウムが開催され、本特集に結実することになった。

記憶とは現在における過去の表象であり、出来事の実在性には関与しない——記憶論にはびこるこの現在主義に対して、記憶の側から異議が申し立てられている。語りや表象とは違い、記憶は主体の統治下にはない。記憶には記憶固有の力と動きがあり、主体に成り代わって過去を証言することもある、と。「記憶の存在論」ともいうべき課題が、ここにはある。昨今、この課題はもっぱら「トラウマ記憶」として主題化されてきた。

「トラウマ記憶」は、一方で、経験主義の手続きでは認識することのできない出来事に接近する手掛かりを与えてくれる。同時に、記憶された出来事とその帰結のあいだに必ず

*なおの あきこ 京都大学人文科学研究所 准教授

しも単純な因果関係を打ち立てることができないという「トラウマ記憶」の性質を強調して、出来事が否認されることもある。だからといって、修正主義に対抗するために、「トラウマ記憶」の表現を、出来事の「証拠」として捉えてしまうと、記憶が記憶として存在することの意味に思考を閉ざし、記憶が切り開こうとした知の可能性を否定することになってしまう。

本シンポジウムでは、過去の——しばしば不可視の、それゆえそれを探し出すことから始めねばならない——痕跡として記憶を捉え、「抑圧された者／物たち」の記憶から歴史を切り拓くことの困難と可能性を、哲学、社会学、歴史学、精神分析学の立場から考察していきたい。

このような趣旨のもと、2019年11月2日（於：広島市立大学サテライトキャンパス）と2020年12月5日（於：京都大学人文科学研究所）の2度にわたって、公開シンポジウム「記憶の存在論と歴史の地平」(I, II)が開催された。広島で開催したシンポジウムには、京都から立木康介さん（京都大学人文科学研究所）と富山一郎さん（同志社大学グローバル・スタディーズ研究科）をお招きし、立木さんは「トラウマ記憶とトラウマ経験のあいだ——精神分析的外傷論アップデートの試み」、富山さんは「それは誰の記憶なのか——森崎和江『まっくら』における生」というタイトルで報告してくださった。加えて、直野（広島市立大学広島平和研究所）が「あなたの痛みが私を貫く——被爆の記憶の主体と境界」と題して報告した。その後、柿木伸之さん（広島市立大学国際学部）に討論者としてコメントをいただき、会場も含めて、ディスカッションを行った。第2回のシンポジウムは、新型コロナウイルス感染症拡大が少し収まっていたこともあり、京都に柿木さんをお招きして開催することができた。柿木さんが「地を這うものたちの歴史——断絶の記憶から」、直野が「「ありえない」出来事の行方——原爆の記憶と性暴力の記憶」と題して報告し、富山さんと立木さんに討論者としてコメントをいただいた後、オンラインの参加者を含めてディスカッションを行った。本特集は、広島と京都でのシンポジウムにおいて交わされた言葉を念頭に、それぞれが「記憶」が差し出す問いと向きあい、格闘しながら書き上げた論文で構成されている。記憶研究の論点として読んでいただくこともできるが、なにが記憶にかけられているのかを共に考える、invitationとして受け取っていただければ幸いである。

なお、2度のシンポジウムは、科学研究費基盤研究C「集合的記憶論とトラウマ記憶論の接合可能性の探求」（研究代表者：直野章子）の研究助成を受けている。また、京都大学でのシンポジウムは、京都大学人文科学研究所に共催していただき「人文研アカデミー」として開催された。最後になるが、広島でのシンポジウムでは、松嶋健さん（広島大学）に司会と議論のモデレーターを務めていただき、京都でのシンポジウムでは、オンライン開催の準備や会場の設

定など、柴田秀樹さん（京都大学）に助けていただいた。ここに記して感謝したい。

注

- 1) Andreas Huyssen, *Present Pasts: Urban Palimpsests and the Politics of Memory* (Stanford University Press, 2003).
- 2) 例えば、次のようなものがある。Siobhan Kattago ed., *The Ashgate Research Companion to Memory Studies* (Routledge, 2020), Dmitri Nikulin ed., *Memory: A History* (Oxford University Press, 2015), Jeffrey K. Olick, Vered Vinitzky-Seroussi, and Daniel Levy, eds., *Collective Memory Reader* (Oxford University Press, 2011), Anna Lisa Tota and Trever Hagen, eds., *Routledge International Handbook of Memory Studies* (Routledge, 2015), Endel Tulving and Fergus I. M. Craik, eds., *The Oxford Handbook of Memory* (Oxford University Press, 2000).